

令和2年度
入学試験問題

第2回

国語

- 1 問題用紙は監督者かんとくしゃの指示があるまでは開いてはいけません。
- 2 開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入して下さい。
- 4 記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点くとうてんや符号ふごうは一字として数えるものとします。
- 5 問題は1ページから16ページまであります。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

森村学園中等部

— 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

A 食べ物家族で分かち合い、共同体でもに子育てを行うといった行動は、人間の心を進化させ、高い共感能力を芽生えさせました。共感能力とは、自分以外のものの気持ちを理解する力のこと。^①人間以外にも、ゴリラやサルにも共感能力は見られますが、人間ほどではありません。^②せん。

② 一九九〇年代に「ミラーニューロン」というものがイタリアの研究チームによって発見されました。ミラーニューロンとは、鏡のように映し出す神経細胞、という意味です。マカクザルというサルで調べられたのですが、ある行為こういをしている実験者（人間）を見ているサルの脳の中を見ると、その行為を実際に行っている実験者の脳の中で発火しているのと同じところが発火しています。

これはつまり、行為を見ているサルは、行為をしている実験者と同じことをやっている気分になっているということ。見ているだけで、同じことをやっている気分になっているんですね。だから鏡に映るかのようには、脳と同じ場所が反応するんです。

この脳の反応は共感能力を意味しています。最近では、機能的核磁気共鳴画像法（fMRI）などを用いて人間の脳にも強力なミラーニューロンが存在することが強く示唆しきされています。サルに比べて、人にはとても高い共感能力があるということです。

共感能力が発達することで、人間の子どもはほかの類人猿るいじんえんの子どもにはない「懂れるあこが」という能力を持つようになりました。「将来、あんな大人になりたい」「社会で、こんなことをしたい」といった気持ちを持って、人間の子どもたちは成長します。ゴリラの子どもは当たり前のように大人になっていきます。成長の過程で何かになりたいと思うことはないでしょう。

人間の子どもは懂れの対象を見つけ出し、目標を立て、他者に自分を重ね合わせて未来を想像します。すると大人は、子どもにいろいろ教えてやりたくなくなります。子どもがいろいろ未来に夢をはせるものだから、大人はついついその手伝いをしたくなるのですね。大人たちは育児にかかわり、子どもたちを導いてやる。これが教育です。教育とは子育ての延長ですね。人間の子育ては、ほかの霊長類れいちょうるいに比べてますます長くなっていききました。

③ 教育というのは人間ならではのものです。これはとてもお節介せつかいな行為で、非常に人間らしいものと言えます。頼まれてもいないし望まれてもいないのに助けにいくということが人間にはあって、教育はその最たるものなのです。

ではどうしてそんなにお節介になるかというと、共感力を高めて作り出したシンパシーという心理状態がもとになっている。シンパシー、つまり同情という感情はほかの霊長類には希薄きはくです。人間に特殊とくしゆな情緒せきじゆなんです。

同情心とは、相手の気持ちになり痛みを分かち合う心です。この心がなければ、人間社会は作れません。共感以上の同情という感情を手に入れた人間は、次第に「向社会的行動」を起こすようになります。

向社会的行動とは、「相手のために何かをしてあげたい」「他人のために役立つことをしたい」という思いに基づく行動です。人類が食べ物を

運び、道具の作り方を仲間伝えたのも、火をおこして調理を工夫したのも、子どもたちに教育を施し始めたのも、すべて向社会的行動だろうと私は思います。

大昔から人類は家族のために無償で世話を焼き、共同体の中では互いに力を出し合い、助け合っていたのでしよう。認知能力が高まったから、このような思いやりのある社会が作られたというよりは、その逆で、

人間の持っている普遍的な社会性というのは、次の三つだと私は考えています。

ひとつは、見返りのない奉仕をすること。これは家族内では当たり前のことですが、そこに留まらないで、見ず知らずの相手や自分とはゆかりのない地域のためにボランティア活動などを行えるのが人間です。

人間は、共感能力を成長期に身につけます。自分を最優先して愛してくれる家族に守られながら「奉仕」の精神を学んでいきます。そんな環境の中で、「誰かに何かをしてあげたい」という気持ちが育っていく。そしてその思いは家族の枠を超えて、共同体に対しても、もっと広い社会に対しても広がっていきます。

二つめは互酬性です。何かを誰かにしてもらったら、必ずお返しする。こちらがしてあげたときには、お返しがある。これは共同体の維持のためのルールですね。会社などの組織も基本的にはこのルールのもとに成り立っています。また、お金を払ってモノやサービスなどの価値を得るといふ経済活動が、まさしく人間の互酬性を表しています。

三つめは帰属意識です。自分がどこに所属しているか、という意識を人間は一生、持ち続けます。たとえば私の場合は、山極家の寿一という男で、京都大学で教鞭をとっている。私の帰属意識は山極という家と、京都大学という職場にあります。それがアイデンティティのひとつになる。

⑤ 逆説的ですが、人間は帰属意識を持っているからこそ、いろんな集団を渡り歩くことができます。集団を行き来する際、常に人間は自分の所属を確認し、それを証明しなくてはいけません。それはほかの動物にはできないことです。人間は、帰属意識を持っているからこそ世界中を歩き回ることもできるし、自分自身の行動範囲や考え方を広げていけるのです。人間は相手との差異を認め尊重し合いつつ、きちんと付き合える能力を持っていますが、その基本に帰属意識があると思います。

③ 家族も共同体もなくなってしまうたら、人間は帰属意識も失います。人間は、互いに協力する必要性も、共感する必要性すらも見出せなくなっていくでしょう。

個人の利益さえ獲得すればいいなら、何かを誰かと分かち合う必要もありません。他人を思いやる必要もありません。遠くで誰かが苦しんでいる事実よりも、手近な享樂を選ぶでしょう。どこかの国の紛争なんて、他人事。自分に関係ないから共感なんてする必要もない。これはまさにサルの社会にはかなりません。

サルの社会に近づくということは、人間が自分の利益のために集団を作るといふことです。そうなれば、個人の生活は今よりも効率的で

自由になります。しかし、他人と気持ちを通じ合わせることはできなくなってしまいました。

もしも本当に人間社会がサル社会のようになってしまったら、どうなるのでしょうか。サル社会は序列で成り立つピラミッド型の社会です。C 社会、とも言い換えられます。そんな社会では、人間の平等意識は崩壊するでしょう。

⑥ 今、日本ではあえて家族を作らず個人の生活を送る人も増えてきました。家族の束縛から離れて、自由で気ままに暮らそうというわけです。しかしここには見落とされているひとつの危険な事実があります。

それは「人間がひとりで生きることが、平等に生きることには結びつかない」という事実です。家族を失い、個人になってしまったとたん、人間は上下関係をルールとする社会システムの中に組み込まれやすくなってしまふのです。

家族という集団に属していれば、その中で自分の位置は安定します。

(中略)

家族には、家族内の問題を解決し、家族がどんな選択をするのかを決める決定権があります。家族にしか家族のことは決められません。「私には家族がある」「私は家族を持っている」という意識こそが、人間の心の安定の根底にあるものだと思います。

家族をなくして集団原理だけでやっていくことは、優劣を重視したサル社会に移行することだと私は今、思っています。

(山極寿一『サル化』する人間社会』より)

※ 問題作成の都合上、原文の表記を一部改めたり、文章の一部を省略したりしたところがあります。

(注) *示唆……………それとなく気づかせること。

*情緒……………ものごとに触れて起こるさまざまな感情。

*普遍的……………ある範囲においてすべてのものに当てはまるさま。

*教鞭をとる……………教師として授業をする。

*差異……………他と比較してのちがひ。

*享楽……………快楽にふける楽しむこと。

問一 —— ①「人間以外にも、ゴリラやサルにも共感能力は見られますが、人間ほどではありません」とありますが、「ゴリラやサル」に

比べて高い共感能力をもつようになった「人間」は実際にどのようなことをするのですか。具体的に述べられている部分をA段落内から探し、二〇字以内にまとめて説明しなさい。

問二 —— ②「一九九〇年代に『ミラーニューロン』というものがイタリアの研究チームによって発見されました」とありますが、筆者が

ここでこの話題を入れた意図を説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人間はサルやゴリラよりも優れた脳を持っていることを読者に印象付けるため。

イ サルの脳の反応から人間の脳にも同じことが起こるということを証明するため。

ウ サルの脳を例として挙げ共感能力というものを脳科学の観点から説明するため。

エ 人間にはサルやゴリラよりもさらに高い共感能力があることを結論付けるため。

問三 —— ③「教育というのは人間ならではのものです」とありますが、なぜそう言えるのですか。その説明として最も適当なものを

次から選び、記号で答えなさい。

ア 子どもに関わる時間の長い人間にとって教育は子育ての延長にあたるものだから。

イ 教育のような高度なコミュニケーションは他の類人猿るいじんえんにはまねできないから。

ウ 子どもの先に立ってお節介せつかいをするのは人間の大人にしか見られない行動だから。

エ 相手の心に寄り添よって助けたいと思う強い同情心は他の動物には見られないから。

問四 A・Bに入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア A「向社会的行動」 | B「人間の認知能力を高めた」

イ A「向社会的行動」 | B「子どもたちへの教育を広めた」

ウ A「思いやりのある社会」 | B「人間の向社会的行動を促うながした」

エ A「思いやりのある社会」 | B「道具の作り方を広めた」

問五 ———— ④ 「人間の互酬性」とありますが、これに当てはまらないものを次の事例の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 今日(けふ)は両親(りやうしん)の結婚(けっこん)記念日(ねんぴ)のお祝い(いわい)で家族(かぞ)が集(あ)まるので、食事代(しょくじだい)とは別にレストランに部屋料(へやりょう)金を払(はら)って特別(とくべつ)個室(こしつ)を予約(よやく)した。
イ いつも何か(なに)かと親切(せんせつ)にくれくれるヤマダ君(くん)が風邪(かぜ)で学校(がっこう)を欠席(けっせき)したので、お見舞(みま)いに行(い)き授業(じゆぎや)のノート(ノート)を貸(か)してあげ(あげ)ようと思う。
ウ クラス担任(たんにん)の先生(せんせい)に年賀状(ねんがじやう)を出(だ)したところ、今年(ことし)の干支(えと)のイラスト(イラスト)と先生(せんせい)からのメッセ(メッセージ)が描(か)かれたすてきな年賀状(ねんがじやう)が届(と)いた。
エ 火災(かさい)の現場(げんば)に居合(い)合わせた地元(じよん)の高校生(こうせい)が建物(たてもの)内に逃(に)げ遅(おそ)れた幼児(ようじ)を救助(きうじゆ)し、後日(ごじつ)その高校生(こうせい)が通(と)う学校(がっこう)の校長(けいりやう)先生(せんせい)から表彰(ひやうじやう)された。

問六 ———— ⑤ 「人間(にんげん)は帰属意識(きじゆしじゆく)を持って(も)いるからこそ、いろん(いろん)な集団(しゆたい)を渡(わた)り歩(ある)くことができます」とはどう(どう)いうこと(こと)ですか。その説明(せ明明)として最(も)も適(た)当(たう)なもの(もの)を次(つぎ)から選(えら)び、記号(きごう)で答(こた)えなさい。

- ア 自分(じぶん)は集団(しゆたい)の一員(いちゐん)である(である)という意識(いしじゆく)が心(こゝろ)の支(た)えとなり、それ(それ)によつて自(みづか)らの足(あし)で外(ぐわい)の世界(せかい)に向(むか)かってい(い)けるとい(い)うこと(こと)。
イ 家族(かぞ)に縛(しば)られて感(かん)じる不自由(ふじゆう)さが反動(はんどう)となつて、個人(こじん)の行(こう)動(どう)範(はん)圍(ゐ)を広(ひろ)げ積極(せきこく)的に他(た)の集(あ)まりに目(め)を向(む)けさせてい(い)るとい(い)うこと(こと)。
ウ 自(みづか)らの所屬(しよじゆく)を確(た)認(にん)し、それ(それ)を周(しゆ)圍(ゐ)の人(ひと)々(々)に証(しやう)明(めい)して(して)いる行(こう)為(ゐ)が、自(みづか)らの在(あ)り方(かた)や生(な)き方(かた)を周(しゆ)圍(ゐ)に認(にん)識(し)させてい(い)るとい(い)うこと(こと)。
エ 自(みづか)らの所屬(しよじゆく)して(して)いる集(あ)まりを意(い)識(し)する(する)こと(こと)で、他(た)の集(あ)まりと(と)の違(ちが)い(い)を認(にん)め合(あ)い、互(たが)いに尊(たが)重(じゆう)して共(き)生(せい)でき(き)るとい(い)うこと(こと)。

問七 ———— ⑥ 「C」に当(あ)てはま(ま)る語句(ごくう)を次(つぎ)から選(えら)び、記号(きごう)で答(こた)えなさい。

- ア 効(き)率(りつ)を重(じゆう)視(し)し利(り)益(えき)だけ(だけ)が優(ゆう)先(せん)され(さ)れる
イ 人(ひと)を負(お)かし自(みづか)らは勝(かち)とうとす(する)
ウ 自(みづか)ら以外(い)の他(た)人(ひと)には興(き)味(み)を(を)示(し)さな(な)い
エ 人(ひと)々(々)が積極(せきこく)的(てき)に関(かん)わ(わ)る(る)うと(と)し(し)ない

問八 ———— ⑥ 「今(いま)、日本(にっぽん)ではあ(あ)えて家(か)族(ぞく)を作(つく)らな(な)い個人(こじん)の生(な)活(かつ)を送(おく)る人(ひと)も増(ぞ)えてき(き)ました」とあり(あ)りますが、筆(ふで)者(しや)は(は)この事(こと)態(たい)が(が)ど(ど)のよ(よ)うな

問題(もんだい)をもた(も)た(ら)すこと(こと)にな(な)ると考(かん)えて(て)いま(いま)すか。文(ぶん)中(ちゆう)の言(ごん)葉(えつ)を(を)使(つか)つて五(ご)十字(じゆうじ)以上(いじゆう)六(ろく)十字(じゆうじ)以内(い)で説(せつ)明(めい)しな(な)さい。

問九

⑦「サル社会に移行すること」について次の問いに答えなさい。

1 「サル社会」とは対比的な人間社会の本来の在り方について述べている次の文の **ア(2字)** ・ **イ(3字)** に入る語句を **A** 段落内からぬき出して答えなさい。

人間社会とは本来 **ア(2字)** に対しては見返りを求めず世話をしやり、 **イ(3字)** の中では互いに助け合って生活するものである。

2 次のAからCの図は現代社会で見られる問題点をイラストにしたものです。AからCの図から一つ選び、選んだ図と筆者が述べる

「サル社会」の関連性を見つけ、どのような点で筆者のいう「サル社会」化と関連しているかを説明しなさい。(解答らんを選んだ記号を○すること)

A



B



C



二次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

六年前の秋、この雑木林で、私の次女が年老いた「妖精」に出会った。そのとき、シホは小学三年生だった。

「ほんとよ。ぜったい、いたんだからあ」

十月半ばの午後、近所の友だちが飼犬の運動に行くのに付き合っ、シホは林へ行っただけだ。

林の中で鎖をはなしたら、犬は深く積んだ落ち葉をけちらして突っ走って行ったきり戻って来ない。友達と二手に分かれて、犬の名を呼びながら、林の中を探しまわった。

すると、いきなりシホの眼前に、その「妖精」が現れたのだ。

一本の木が地面のすぐ上から曲がって、地をはうように伸びている——その幹に、小柄なおばあさんが、ちょこんと腰かけていた。こげ茶色の大きなショールに包まれて、ひざの上には太い編み棒と毛糸の入った手提げかごがあった。

髪は真っ白、小さな顔も真っ白で、子供のようなくくりくりした黒い瞳がじつと娘をみつめていた。その体があまりに小さいので、長めのスカートからのぞいている黒靴の爪先が地面から高く離れていた。

シホは立ちすくんだ。意外なところにおばあさんがいたのだから、それだけでも驚くのは当たり前である。ところが、おばあさんのようすを観察しているうちに、シホは震え上がってしまった。つい最近読んだ童話の本を思い出したからである。その本には、魔法を使って人間を石や木に変えてしまう意地悪な「妖精」が出てきたのだ。それが、眼の前のおばあさんとそっくりだった。

——いけない。①このおばあさんは、きつと「妖精」だわ。眼を見合わせていると、魔法をかけられちゃう。

とつさに、シホは伏眼になり、足もとだけを見るようにして、そろそろと後ずさった。

「それは、よかった。実に適切な判断だった。非常に沈着な行動だったぞ」

と、私は娘に言った。

「おばあさんが妖精だったら、おまえは雑木林のくぬぎの木にされていたかもしれないんだからな」

小学三年生の娘は、父親のまじめな反応に大いに満足したようだった。しかし、そばにいた妻は、笑いを含んだ眼つきで、娘と私を見比べていた。娘の話を聞いていた夕食前のテーブルで、その日も私は少し早めの晩酌を、すでに定量以上に過ぎたからである。

数日後、シホは「妖精」のおばあさんから毛糸で作った親指大の人形をもらってきた。

「いやだあ、妖精なんかじゃなかったよ。カペナム病院にいるおばあちゃんだった。どうもおかしいと思ったんだ、あたし」

小学三年生の幼い頭でも、童話に出てくる「妖精」が近所の雑木林にいるわけはない、と気づいたわけだ。シホは、「真偽」を確かめに、一人で林へ出かけたのである。

「妖精」のおばあさんは、いつかと同じ木の幹に腰かけて、たくさんの小さな毛糸人形をこしらえていたそうである。

「その人形は、あの林に入りこんだ子供たちかもしれないぞ。魔法で毛糸人形にされたんだぞ、きつと。油断するな」

私がいうと、娘は、けらけらと笑った。彼女の頭からは、すでに意地悪な「妖精」のイメージは消えていたようである。

(中略)

シホの出会った「妖精」のおばあさんは、この病棟びょうどうの入院患者にゅういんかんじやだった。しかも、すでに一年以上も滞留びたいりゅうしているらしい。脳卒中のうそちゆうのために、右手と右足が不自由になっていくという。いつも編んでいる毛糸人形は、リハビリテーションの一種なのだろうか。とにかく、一個完成するまでには、正常な人の五倍も時間がかかるのだそうだ。——といった話を、シホは毎日のように私に報告した。

シホは、おばあさんに会いに、雑木林へ日参するようになっていたのである。帰宅したシホの髪の毛から、雑木林の枯葉かれはの甘い匂においが漂ただよっていた。

十一月に入って、空気が冷たくなっても、シホは雑木林へ行くのを止めなかった。学校から帰るとすぐに自転車じてんしゃを駆かって出かけた。

「だってえ、あたしが行かないと、おばあちゃんは泣きたくなるんだってもの。いつも、明日も来てね、ってゲンマンするんだよ」

「こんなに肌寒はださむくなっても、おばあさんは雑木林に来てるのかい。身体によくはないはずなんだがなあ」

「ううん。雑木林の中は温かいんだよ。それに、あたしがおばあちゃんのシヨールの中に一緒いっしょに入っていると、とっても温かいんだって。シヨールの中でお話をしながら、おばあちゃんは人形を編んでいるんだよ」

「どんなお話をするんだい」

「そうねえ。あたしが学校で習ったこと。……それから、大連だいにんっていう遠い町のこと。ずうっと前、おばあちゃんは、そこに住んでいたんだって。……それからねえ、二人でおやつを食べるの」

紙に包んだ二人分の「おやつ」を、ときおり妻が持たせてやっていた。「お菓子かしの本」や「家庭医学の本」と首っぴきで、^③ 高血圧こうけつあつの人に影響えいきやうのなさそうな菓子を、妻は真剣しんけんになって作った。

実は、その頃、妻の父も脳卒中のうそちゆうで倒たおれていたのである。東北に住む病父が、間もなく訪れる厳寒の冬を無事に乗り切れるかどうか、大いに危ぶまれていた。

「おばあちゃんがねえ、こんなにおいしいお菓子を作ってくれるお母さんに、ぜひお会いしたいねえって。足が治ったら、きつとお礼にうかがいますって……」

「そうねえ。そのうちお母さんがご挨拶あいさつに行かなくちゃね。シホちゃんがとても可愛かわいがっていただいてるんだしねえ」
と、妻は遠くを見る眼をしていった。

十一月中旬、妻の父が二度目の脳卒中の発作を起こした。妻は、とりあえず単身、父親の病床へ駆けつけた。

私と娘は、妻からの「報せ」を待つことになった。いつでも、すぐに駆けつけることができるように準備していた。

その間、シホは遠慮がちに雑木林へ出かけた。そして、短い時間で帰ってきた。おばあさんからも「おだいじに」という伝言をもらってきた。やがて、私たちが列車に乗らなければならない日がやってきた。

シホにとっては、初めて体験する身内の不幸であった。幼いときから親しんだ祖父との別れは、小さな胸にも深い傷を刻んだようだ。

いつもは活発な笑い声を立てている子が、大人のような暗い顔をしているのは痛々しかった。別れのための儀式がとり行われている間じゅう、娘はうつむきつづけた。

娘の中で、何かが変化したのを、私は目撃したように思った。実は「祖父の死」というものが、これほどの衝撃を九歳の子供に与えるとは、私は予想もしなかったのである。

シホの変化は、そのまま雑木林のおばあさんとの交際にもつながった。東北から帰ってきてから、シホはまるでおばあさんのことを忘れたように雑木林から遠のいた。

それがきわめて「自然」だったので、私も妻も顔を見合わせただけで一言も触れなかった。おばあさんがシホを心待ちにしているだろうことは察せられた。

しかし、私たちにはそのときの娘の心に立ち入ることはどうしてもできなかった。もしかしたら、シホはおばあさんのことを本当に忘れてしまったのかもしれない。そのような「自然さ」だった。

およそ二年半後の春——六年生になったばかりのシホが雑木林のおばあさんのことを思い出したのは、ほんのちよつとしたきっかけからだった。

その日は祝祭日だった。ところが、せっかくのお休みなのに、シホは前夜から風邪で発熱していた。行きつけの病院もお休みである。

そこで、私はシホを自転車の荷台に乗せてカペナム病院へ行くことにした。それまでは一度も通院したことはない。ただ、こうした日もちゃんと診療してくれると聞いていたのである。

看護婦さんは、すべて修道女であった。優しい笑顔を浮かべて、てきぱきと注射を打ち、ルゴールを塗ってくれた。

薬の出るのを待っていると、シホが、そうだ、といった。

「やっぱり聞いてみようつと」

シホは、ベンチから立ち上がって、気軽そうに受付の小窓をのぞきこんだ。

「あのう。ここに入院していた患者さんで、いつも毛糸人形を編んでいたおばあちゃんですけど、いまどうしているかご存じありませんか。

白い髪の(1)「小さな」おばあちゃんですけれど」

受付の若い修道女は、小窓の向こうから娘と私の顔を見比べてから、しばらく視線を宙に泳がせた。

「いまは、そのような方はいませんねえ。いつごろ入院していらしたんですか」

「二年半ぐらい前ですけど……」

「それじゃあ、わたしがここに来る前ですね。ちょっと待ってください」

若い修道女は、受付の部屋から出てきて、すぐに隣の薬剤室へ入って行った。すると、ほとんど間髪を入れず、という感じで、その薬剤室から中年の修道女が飛び出してきた。右手にシホのものらしい「カルテ」を持っている。

⑤「あなたがシホちゃんなのね。やっぱりいたのね。ほんとだったのね」

修道女は、低い声で、興奮をおさえるようにして、いった。

「探したのよ。宮下さんに頼まれてねえ」

修道女の話によると、シホが会いに来なくなってから一カ月ほど、おばあさんは毎日のように雑木林に行って待っていたのだそう。そのうちに十二月の半ばが過ぎて、寒気が厳しくなったので、病院では外出を許さないようにした。いまにきくと、シホちゃんは病院のほうに来てくれるわよ、と修道女たちはおばあさんをなだめるばかりだった、という。

クリスマスに近いある日。おばあさんは修道女に泣いて頼んだ(2)「そうだ」。——シホちゃんに渡したいものがあるから、どうしても探してほしい。これを渡すだけでいいのだから、見つけて連れてきてください。

「宮下さんは、よほどシホちゃんが好きだったのね。——わたしたちは手わけして、このあたり一帯を探しました。でも、このカルテのご住所を見ると、探した範囲からはだいぶ離れているようねえ」

修道女はため息をついて、小さく笑った。そして、ちょっと待ってね、といいおいて薬剤室へ入って行った。しばらくしてから、彼女は茶色の袋を持って現われた。

「これ、そのときの宮下さんからシホちゃんへのクリスマスプレゼントなのよ。あのあと、わたしが預かっていました」

二年以上も、とつぶやきながら、シホは袋を開けてみた。手袋だった。赤と緑の毛糸で編んだミトンの可愛い手袋だった。

「それはね、宮下さんがシホちゃんに内緒で、毎晩少しずつ編んだものなのよ。あの不自由な手で、一か月半もかかって……」
手袋は、それほど長い日数をかけたにしては、あまりに小さかった。常人の五倍も時間がかかるという苦しい思いをして、ようやく編み上げた手袋だった。

シホは、小さな手袋を両手に包み、顔に強く押しつけた。(6)「微かな鳴咽がもれ出た。」

「それで」と私が代わりに聞いた。「宮下さんは、今どうなさっていますか」

「はい、お元気ですよ。まだ、この病院に入院していらっしやいます」

シホが顔を上げた。涙でぬれた目が輝いた。

「会いたい。会ってもいいですか」

シホは、すぐさま走り出そうというけはいを見せた。それを修道女が静かに押しとどめた。

「会っても仕方ありません。もうシホちゃんが誰なのか、分からないんですよ。この一年ほどで、急にボケが激しくなりましたね。……しきりに大連のことばかり話しています。まわりの人を、みんな大連に住んでいたときの近所の人だと思いませんか。ご本人は大連にいます。だって思っているんでしょね」

「大連に……。」

「そう。宮下さんは、もう大連へ帰ってしまったんですよ。むかしの大連にね」

カペナウム病院を辞去したあと、自転車の荷台からシホが、雑木林へ寄って行きたい、といった。熱のあるのが心配だったが、私はうなずいて、自転車を雑木林の入口の方へ向けた。

(内海隆一郎 『小さな手袋』 より)

※ 問題作成の都合上、原文の表記を一部改めたり、文章の一部を省略したりしたところがあります。

(注) * 沈着……………落ち着いていること。

* 晩酌……………家庭で夕食の時に酒を飲むこと。

* 真偽……………本当のことかうそのことか。

* 滞留……………長時間同じところにとどまっていること。

* 脳卒中……………脳の血管がトラブルを起こす病気。

* 駆る……………走らせる。

* 大連……………中国遼東半島にある都市名。

* ルゴール……………のどや口の中の殺きんに使う水溶液。

* 中年……………青年と老年との中間の年ごろの階層。

* 嗚咽……………声をつまらせて泣くこと。

問一 —— ①「このおばあさんは、きっと「妖精」だわ」とありますが、シホがおばあさんを妖精だと思ったのはなぜですか。その理由と

して最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア おばあさんが髪かみの毛けも顔かほも真まっ白しろで、老人らうじんなのにこどものような純粋じゆんすいなひとみをしていたから。

イ 最近さいきん読よんだ童話どうわに出てきた妖精ようせいの姿すがたと、林はやしの中で出会あったおばあさんの姿すがたがとても似にていたから。

ウ 童話どうわに出てきた意地悪いぢあくな妖精ようせいを探たづねしていたら、ちようど林はやしの中でそれによく似にたおばあさんに出会あったから。

エ おばあさんの体ていがとても小さく軽かろいため、足あしが地面じめんからはなれて、体ていが宙そらに浮ういているように見みえたから。

問二 —— ②「そばにいた妻つまは、笑わらいを含ふくんだ眼まなこつきで、娘むすめと私わたしを見比みひべていた」とありますが、このときの「妻」の心情の説明として

最も適当いちとうなものを次つぎから選えらび、記号きごうで答こたえなさい。

ア お酒さけに酔よった「私わたし」が、妖精ようせいはいないとシホに教おしえるのではなく、一いっ緒しょになつて妖精ようせいの存在そんざいを信しんじてしまつていいることを苦く々くしく思おもつていいる。

思おもつていいる。

イ シホの話を本気ほんきにしていいるふりをしながらからかつていいる「私わたし」とそれを真ま剣けんに受うけ止とめていいるシホを、おかしくもほほえましく思おもつていいる。

思おもつていいる。

ウ 幼こいシホが半信半疑はんしんはんぎで話をししているののに對たいして、大人おとなの「私わたし」の方が妖精ようせいの存在そんざいを信しんじてシホの身みを案あんじていいることをこっけいに思おもつていいる。

思おもつていいる。

エ 現実げんじつに存在そんざいするはずのない妖精ようせいを信しんじ、自分おのれの妖精ようせいへの対応たいおうに満足まんぞくしていいる「私わたし」と娘むすめを、夢見ゆめみがちちな困こつた親子おやこだと情なさけけなく思おもつていいる。

思おもつていいる。

問三 —— ③「高血圧たうけつあつの人に影響えいきやうのなさそうさうな菓子かしを、妻つまは真ま剣けんになつて作つくつた」とありますが、「私わたし」の妻つまがここのような菓子かしを作つくるとき、

おばあさんおばあさんとある人物じんぶつを重かさねていいたと思おもえられます。それそれをふまえて妻つまが菓子かしを「真ま剣けんになつて作つくつた理由りゆうを四十字しじゅうじ以上いじょう五十字ごじゅうじ以内い以内

で答こたえなさい。

問四

——④「私も妻も顔を見合わせただけで一言も触れなかった」とありますが、シホが雑木林に行かなくなったことについて私や妻が「一言も触れなかった」のはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 明るくよく笑っていたシホが、祖父の死をきっかけに急にふさがちになってしまったことに戸惑い、どう声をかけていいのかわからなかったから。

イ シホが幼いながらに祖父の死に立ち合い、まるで大人のように悲しみに泣き続けているのを見て、親として遠くから見守らなければならぬと思ったから。

ウ 初めての身内の不幸に傷つき、心に大きな変化を迎えているシホを見ると、とてもその繊細な心のうちに立ち入ることができないように思われたから。

エ 祖父の死をきっかけにシホの心に変化が訪れ、自分の傷をいやすためにおばあさんのことは忘れようとシホが考えたことは自然なことだと思ったから。

問五

(1) 小さな・(2) そうだについて、それぞれと——部が文法的に同じものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

(1) 白い髪かみの 小さな おばあちゃん

ア とてもまじめな父親の反応

イ 意外なところから現れた妖精ようせい

ウ こどものような喜び方をする祖父

エ おかしな発言をする弟

(2) おばあさんは修道女に泣いて頼たのんだ そうだ。

ア 林間学校はなかなか楽しそうだ。

イ 幼い孫はもうすぐ眠ねむりそうだ。

ウ あの山は近々噴火ふんかしそうだ。

エ 今年の日本チームはかなり強いそうだ。

問六

—— a 「視線を宙に泳がせ」・ b 「間髪かんはつを入れず」とありますが、 a 「視線を宙に泳がせる」・ b 「間髪かんはつを入れず」の意味として最も
適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

a 視線を宙に泳がせる

ア 目をつぶってじっくりと考えかんが込むようす

イ 遠い空の果てを見つめて思い悩おもんでいるようす

ウ 鋭すまじい目つきであちらこちらをさがし求めるようす

エ 少し顔を上げてどこをみるともなく目を動かすようす

b 間髪かんはつを入れず

ア 少しの時間もおかずに

イ 息いきつきもせずに

ウ すきまを全く開けずに

エ 周囲に目を配らずに

問七

—— ⑤ 「修道女は、低い声で、興奮かんげんをおさえるようにして、いった」とありますが、この時の修道女の心情の説明として最も適当な
ものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 二年半の間みんなで手分けして必死に探し続けていたシホをようやく見つけ出したことに、大きな充実感じゅうじつかんと達成感を感じている。

イ 探したものの見つからず、本当に存在しているのか半信半疑だったシホが実際に存在していたことに驚おどろき、胸がいっぱいになって
いる。

ウ おばあさんがぼけてしまった今になってシホが現れたことに、もっと早くシホが現れてくれたらよかったのにと悔くやしさを感じて
いる。

エ ぼけてしまったおばあさんのたわごとだと思い、シホが本当に存在するとは信じていなかった自分の浅はかさとおろかさを痛感
している。

問八 ——— ⑥ 「微かすかな鳴咽おえつがもれ出た」とありますが、この時のシホの心情を四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問九 ——— ⑦ 「宮下さんは、もう大連だいらんへ帰ってしまったんですよ」とありますが、この修道女の言葉にはどのような意図があると考えられますか。当あてはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア おばあさんのボケがひどくなってしまうことをシホに直接言わず、シホを悲しませないようにする意図。

イ おばあさんが生きていることを知って会いたがっているシホに、もう会うべきではないことをそつと伝えようとする意図。

ウ おばあさんはなつかしい思い出の中で生きているのだということをシホに伝えて、シホをなぐさめようとする意図。

エ おばあさんが思い出の土地にもどったことを伝えておばあさんにはもう会えないと、シホをあきらめさせようとする意図。

三 次の①から⑧の——部のカタカナを漢字になおし、⑨から⑫の——部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① 道路のカクチヨウ工事が行われる。
- ② 試合中にフシヨウした選手を手当てする。
- ③ 野球場は五万人のカンシユウで満員だった。
- ④ 寺のヒゾウの仏画が公開される。
- ⑤ 美しいキヌイトで織られた布だ。
- ⑥ 大統領がシユウニンの演説を行った。
- ⑦ 世界遺産をタブネる旅に出発した。
- ⑧ 音楽会のヒヒョウが雑誌に出ている。
- ⑨ 相手に筋道を立てて説明した。
- ⑩ この地域はかつて養蚕が盛んだった。
- ⑪ 居間の障子をはりかえた。
- ⑫ インフルエンザが猛威を奮う。